

金子みすゞの代表作「私と小鳥と鈴と」では、「みんなちがって、みんないい」とうたわれています。子どもたちの中にもいろいろな個性があつて、そういつた子どもたちのことばは、何かほっとしたものを与えてくれます。「みんなちがって、みんないい」は、みんながちがっているからこそ、みんないいと積極的に読みかえることもできます。

また「大漁」では「浜は祭りのようだけど、海のなかでは何万の鯛のとむらい、するだろう」とうたわれています。人間は鯛がたくさん捕れたと喜んでいますが、それと対極的に仲間が大勢死んだと悲しんでいる鯛たちがいます。人間には喜びであることが、鯛にとっては悲しみであるということ。このように一つのことばは立場が違えばまったく別のことになってしまいます。また「雀の母さん」という詩でも、弱い立場、無力な立場、一言で言えば「弱者の立場」にたつて詩を書いています。

それに加えて、たとえば「明るい方へ」のように、向上心、たくましさ、未来志向というような積極的な詩も、みすゞの詩の大きな魅力と言えるでしょう。

作曲家大西進は、「三世代でうたえる歌を創りたい」「これは大人の歌、これは子どもの歌というのではなく、良い歌は世代を超えて良い」「二度聞いたら誰でもうたえる歌を作りたい」といって、みすゞの全詩に作曲をしました。金子みすゞの詩を読むだけでなく、メロディーがついて歌として聞いた時、また声を出して一緒に歌ったとき、より詩が直接私たちの情緒に働きかけてきます。このコンサートを聞いた小学生が「みすゞさんの詩がストーンと胸におちた」と感想を述べてくれました。

このコンサートは「金子みすゞさんの詩は、わかりやすい。こんなボクでも喜びや悲しみが伝わってくる」「まるで自分のことを詩にしたようだ」など、世代を超えて多くの人の共感を得ています。

私も「言葉（詩）や音楽」のもっている力を信じ、歌をうたっています。また、美しい日本語をみなさんと味わいたいと思っています。

大勢の皆さんに、このコンサートを聞いていただきたいと思っています。

清水正美



Shimizu Masami 清水正美 ●プロフィール



「歌声喫茶ともしび」でうたうこと20数年。声楽を二期会の大倉由紀枝氏に師事すること10数年。日本の歌、世界の歌、オペラ・アリアからシャンソン、ポピュラーなど、その幅広いレパートリーと説得力のある歌唱は定評がある。現在ともしび新宿店でのステージの他に、小・中学校音楽鑑賞教室や教育委員会主催の音楽会など幅広く出演活動を行っている。

2001年11月から、金子みすゞ作品集(大西進作曲)連続コンサートに取り組んでいる。同コンサートは金子みすゞの全詩512編をすべて作曲しようという大西進の企画によるもので、2004年12月11日に完結(浜離宮朝日ホール)。
2002年5月「金子みすゞ選集CD」、2004年4月「金子みすゞ選集第2集」CDを出版。

ともしび音楽企画

ともしびは、1955年東京新宿の歌声喫茶「灯」で音楽活動を始めました。

1962年に生のオペレッタを専門とする劇団を結成し、1980年にコンサート、イベント、音楽出版を中心とするともしび音楽企画が発足し、子どもから大人までの幅広い音楽の創造と普及に努めてきました。

「夢と生きがいを感じられ、かつ楽しい」そんな音楽創造・制作活動を目指しています。また、地域と暮らしに根ざしたイベントなどにも地域文化の掘り起こしとあわせて、ただ単に音楽をお届けするだけでなく「あなたが主人公」の立場で、子どもからファミリー向けの企画・構成・演出の分野にも、多くの歌手やスタッフの協力のもとで行っています。

作品のご案内

●小川邦美子
「啄木の魅力をうたう」
石川啄木の作品を中心に、小学生から楽しめる作品です。小学校の体育館をはじめホールでも上演できます。伴奏は、ピアノ一本から、企画に合わせて編成します。

●へいらいっしゅい!笑時間
古今亭菊寿の落語、マギー隆司のマジックを中心に、ご希望に合わせて構成します。全年齢対象。

●マギー隆司のマジック笑
マギー司郎の一番弟子、マギー隆司が子どもの目線にたち、幼児から楽しめる50分のおわらいマジックショーです。全年齢対象。

●ともしびパネルシアターコンサート
幼児低学年対象、パネルシアターを使つての企画です。音楽に合わせて、丸と三角と四角の形を使つての造形遊びなど、子どもたちが積極的にステージに乗り出していきます。小学校体育館などで上演します。

●なめちゃんのあつたわいわいライブ
乳児、幼児、低学年対象、会場の子どもたちの年齢に合わせて、その都度プログラムを構成していきます。子供の目線に立った、暖かくて、ホットなライブステージです。幼稚園保育園ホールで上演します。

●出前歌声喫茶
新宿のともしびが全国各地に出前します。司会(歌手)、伴奏者2人から可能。規模に合わせて出演者を増やし、ステージを豊かにします。

〒171-0033 東京都豊島区高田1-12-17
電話 03-6907-3801 FAX 03-6907-3812 HP ●http://www.tomoshibi.co.jp/ Emai ●info@tomoshibi.co.jp

私と小鳥と鈴と



私が両手をひろげても、
お空はちつとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のやうに、
地面を速くは走れない。

私からだをゆすつても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のやうに
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。



みんなちがって みんないい

清水正美コンサート

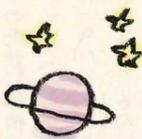
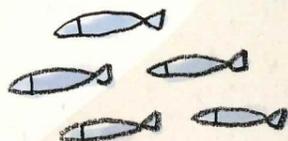
金子みすゞの
こころをうたう

大西進 ●作曲

大漁

朝焼小焼だ
大漁だ
大羽鱈の
大漁だ。

濱は祭りの
やうだけど
海のなかでは
何萬の
鱈のとむらい
するだろう。



金子みすゞの
「こころをうたう」
大西進・作曲

清水正美コンサート

みんなちがって みんないい

金子みすゞの
わかりやすく
情感あふれる言葉を
美しいメロディに
のせて歌う
清水正美のステージ

プログラムは
金子みすゞの512作品の中から、
集いのねらいや対象年齢、季節などに
あわせて構成します。
皆さんのご要望の曲にもお応えできます。

公演時間 50〜80分

曲目例

- 私と小鳥と鈴と 積った雪
- 大漁 粉雪
- どんぐり こころ
- 明るい方へ 星とたんぼぼ
- みんなを好きに このみち
- 学校へ行くみち さよなら

編成

- A 基本編成：5人
清水正美／ピアノ／ヴァイオリン／音響／制作
- B ホール公演など：7人
清水正美／ピアノ／ヴァイオリン／音響／照明／制作
- C 小規模公演：4人
清水正美／ピアノ／音響／制作



明るい方へ

明るい方へ
明るい方へ

一つの葉でも
陽の洩るところへ。

藪かげの草は。

明るい方へ
明るい方へ

翅は焦げよと
灯のあるところへ。

夜飛ぶ蟲は。

明るい方へ
明るい方へ

一分もひろく

日の射すところへ。

都會に住む子等は。



みすゞ全詩の 作曲にとりくんで

作曲家 大西進

金子みすゞの全詩に作曲するということは、まず最初に思うことは「一人の詩人が生涯かけて創作したその「軌跡」をたどること」です。童謡を書こうと決めた日からみすゞさんは、体験を自らたどるように、またもう一人の心の中のみすゞに問いかけるように書き進んだのです。二つ目はいっぱい思いうかぶことの中から何を書こうかと考える時、直接目にふれるもの「出会う」人や、雀や、魚や、雲や、空やそのすべての「在（あ）るもの」「いのちあるもの」になりきって、そこから見つめた思いを削れるだけ削り、短い言葉で書いたのです。そして最後の二行いや最後の一行、さらにはそれさえもはぶいて、結論を広い宇宙へなげだすかのように書いたのです。三つ目は人生さまざま生き方を選ぶチャンスを分れ道の点に立ったとき「これから降る雪はどれがお好き」と（雪に）問いかけ決断をうながすのです。その三つ目の視点は作曲する上で共通するのです。この詩は読まれるためのものなのに、どんな作曲が一番この詩に合うのかと何通りものメロディ、リズムの中から作曲者として「これだ」というものをさぐりあて五線に写します。童謡でありながら多くの大人の心をとらえるのみすゞの詩、だからこそ、三代代でまた家族で口ずさめるものにしたと作曲します。

いくつかの学校で私の「みすゞ」がうたわれるとき、また高齢者の方々が好んで歌われるとき、そのうたごえを聞いて、私自身の人生に大きなはげみとなるなにかが燃え上がるのは、人としての「基盤」が共通だという思いです。

「そこに山があるから登る」というように、512をつくりきる数だけのことでなく、今を生きる人間として、共に考え生きていきたい希いなのです。

Kaneko Misuzu 金子みすゞ プロフィール



金子みすゞ（かねこみすゞ）本名金子テル。明治36（1903）年、山口県大津郡仙崎村（今の長門市）に生まれる。大正末期から昭和の初期に、すぐれた作品を発表し、西條八十に「若き童謡詩人の巨星」と称賛されながら、昭和5（1930）年、26歳の若さで世を去った。

没後その作品は散逸し、幻の童謡詩人と語りつがれるばかりとなったが、童謡詩人・矢崎節夫の長年の努力により童謡512編を納めた遺稿集が見つかり、金子みすゞ全集（JULA出版局）として出版された。そのやさしさに貫かれた詩句の数々は、今確実に人々の心に広がり始めている。

1903	4月11日、山口県大津郡仙崎通村（現長門市）にて父明治36年
1905	2月23日、弟正佑生まれる。
1906	父、清国營口にて死去。金子家は仙崎にて書店を営む。
1907	正佑、上山文英堂店主、上山松蔵と養子縁組。
1916	13才、郡立大津高等女学校入学。
（大正5年）	校友誌「ミサヲ」に「ゆき」発表。
1919	母ミチ、上山松蔵と再婚。
1923	20才、テルは下関市の母のもとに移り、義父上山松蔵の上山文英堂で働き始める。
1925	ペンネーム「みすゞ」で童謡詩を書き、雑誌に投稿を始める。以降1928年までに56編を発表する。
1925	童謡詩人会（西条八十、北原白秋と謝野晶子、野口雨村ら）発起。
1926	23才、2月、結婚。
1930	みすゞ、童謡詩人会に入会。11月、長女ふさえ誕生。3月10日、上山文英堂内に死去。